

11 番（小川義昭君）

議席番号 11 番、白政会、小川義昭です。

通告に従って質問いたします。

ことし 6 月、東洋経済新報社が全国 812 の市と特別区を対象にまとめ、公表した 2019 年度版住みよさランキングにおいて、本市は初めて第 1 位に選ばれました。

このランキングは、東洋経済新報社が 1993 年から継続しています。「安心度」「利便度」「快適度」「富裕度」の 4 部門にわたり、それぞれ詳細な指標を用いて総合的に順位づけしており、多角的かつ深層度の高い指標に基づいた権威あるランキングとして知られています。

今回のランキングでは、前回 16 であった調査指標の数が 22 まで大幅に拡充されたことが特筆されます。人口当たりの犯罪件数や交通事故件数、子供の医療費助成の対象年齢などが新指標として追加されたことにより、過去のランキングとの連続性はなく、順位は大きく変動しています。

本市は 2017 年のランキングにおいて 20 位、2018 年は 25 位とされ、ベストテン入りもかなわなかったわけですが、ことしはより精度の高い調査が行われた結果、新生ランキングのトップに輝く栄誉を手にしました。

具体的に本市の場合、転出入の人口比率や水道料金の安さが評価されて、暮らしの快適度が 8 位、住環境のよさによる富裕度が 77 位と高位につけたことが、総合トップに躍り出た要因と見られています。

これらの結果、この調査では特定の指標の評価が高くても、他の指標の評価が低ければ、総合的なランキングでは上位に食い込めないことを物語っています。

本市の場合は、トップの指標がなくても、上位に評価された指標が複数にわたり、バランスに秀でた住みよさであることがうかがえたのではないのでしょうか。

総じて、本市の生活環境の質の高さを示す結果となったランキングは、日本一住みたいまち白山市を発信していく上で、何よりも心強く、誇らしい情報資源であることは申すまでもありません。

しかしながら、たった一度の栄誉で満足し、まして過信しては決していけません。本市によって不可欠な意識は、全国 1 位の住みやすさと評価された白山市の魅力はどこにあり、その魅力はいかにして生まれたのかを詳しく自己分析し、なお一層の住みよさの向上を不断に目指す志こそが肝要といえるでしょう。

本日は冒頭に、全国ランキングを通じて住みよさという政策概念を取り上げてみましたが、今また、近年、全国の先進的な自治体間でシビックプライドという聞きなれない言葉が脚光を浴び、地域活性化への新たなキーワード、行政の政策指針として浮上してきたことについて、一言申し述べたいと思います。

シビックプライドとは、19 世紀のイギリス北部で語られた言葉とされ、都市に対す

る誇りや愛着といった意味合いを持っています。我が国においても郷土愛という言葉がありますが、シビックプライドは郷土愛という抽象的な概念とは異なり、地域の課題の解決や活性化といった具体的な行動を伴う概念を含んでいる、そこにこそ大きな特色があるといえます。

すなわち、自分自身が地域に携わり、地域をよくしていこうとする姿勢、あるいは自分が地域を動かしているという自覚を醸成することにより、今後の地域活動の原動力でありたいと誓う心の持ちようがシビックプライドであります。

ここで改めて指摘するまでもないのですが、本市のまち・ひと・しごと創生総合戦略平成30年8月改訂版においても、シビックプライドという言葉は使われています。

それは、「基本目標と達成に向けた重点取り組み」の中の、基本目標4「平野部と白山ろく地域の安全・安心な暮らしを守りつなぐ『都市・地域』創生戦略」の「施策の基本的方向」の4項目めです。ここでは魅力ある地域づくりとシビックプライドの醸成がうたわれています。

具体的には「特色ある文化・景観などを活かした取り組みやそれぞれの長所を活かした広域的な連携を進め、魅力ある地域づくりを進めるとともに、コミュニティを支える人材の育成や市民が主体的に地域課題の解決に取り組める環境の整備など、シビックプライドを醸成し、転出者の縮減を図るとともに市民が誇りをもって暮らせる地域づくりを推進する。」と明記され、5点の具体的な取り組みの方向性が掲げられています。

近年、自治体がまちづくりを語ろうとすると、とかく市民参加や市民主体のまちづくり、市民協働のまちづくりといった言葉が盛んにうたわれていますが、市民参加とか市民主体、市民協働といった概念は、ともすると言葉だけがひとり歩きしがちで、現実的な行政政策が成果を上げにくいのが実情ではないでしょうか。

その点、シビックプライドは情熱や決意、意欲といった強い意志と行動力を兼ね備えた政策概念であり、現状から、より一歩前に踏み出す心の持ちようとして、自治体は改めてシビックプライドの醸成という観点に立つべきではないかと考える次第であります。

実際に全国の自治体では、こうした概念が積極的に将来ビジョンに組み込まれており、栃木県足利市のシティプロモーション基本方針は、「市民のシビックプライドの意識が高まれば、市外への転出も少なくなり、定住を望む人もふえてくる」と明快です。

三重県伊賀市のシティプロモーションの指針においても、シビックプライドの効果を「定住、Uターン人口の増加、市民参画意識の向上、市民による情報発信の増加」と記されており、シビックプライドはもはや今後の行政、自治体運営にとって不可欠な政策概念と申してもよいでしょう。

そこで1つ目の質問は、シビックプライドの醸成についてであります。

市長は「健康で笑顔あふれる元気都市 白山」を目指されており、「対話と参加」による市政運営を進めるため、市民の皆さんと笑顔で語り合える地域懇談会「まちづくり

会議」を積極的に開催されています。まずは、その前向きな姿勢に深く敬意を表したいと存じます。

その上でお尋ねいたしますが、市長はまちづくり会議を通じて、市民が安心・安全で住んでよかったと思える地域づくりを強調され、市民協働のまちづくりを目指されています。しかしながら、その言葉の先にどのような具体的な政策を思い浮かべ、実行に移そうとされているのかが、いま一つ明確ではありません。

そこで、市長が思い描く白山市の将来像を行政と一緒に構想し、行動も惜しまないシビックプライド市民をどのような方法で醸成されるのか。また、今後シビックプライドを持つ市民の力を積極的に生かすための取り組みをどのように考えておられるのでしょうか。具体的な方策をお示し願います。